沼津市明治史料館通信

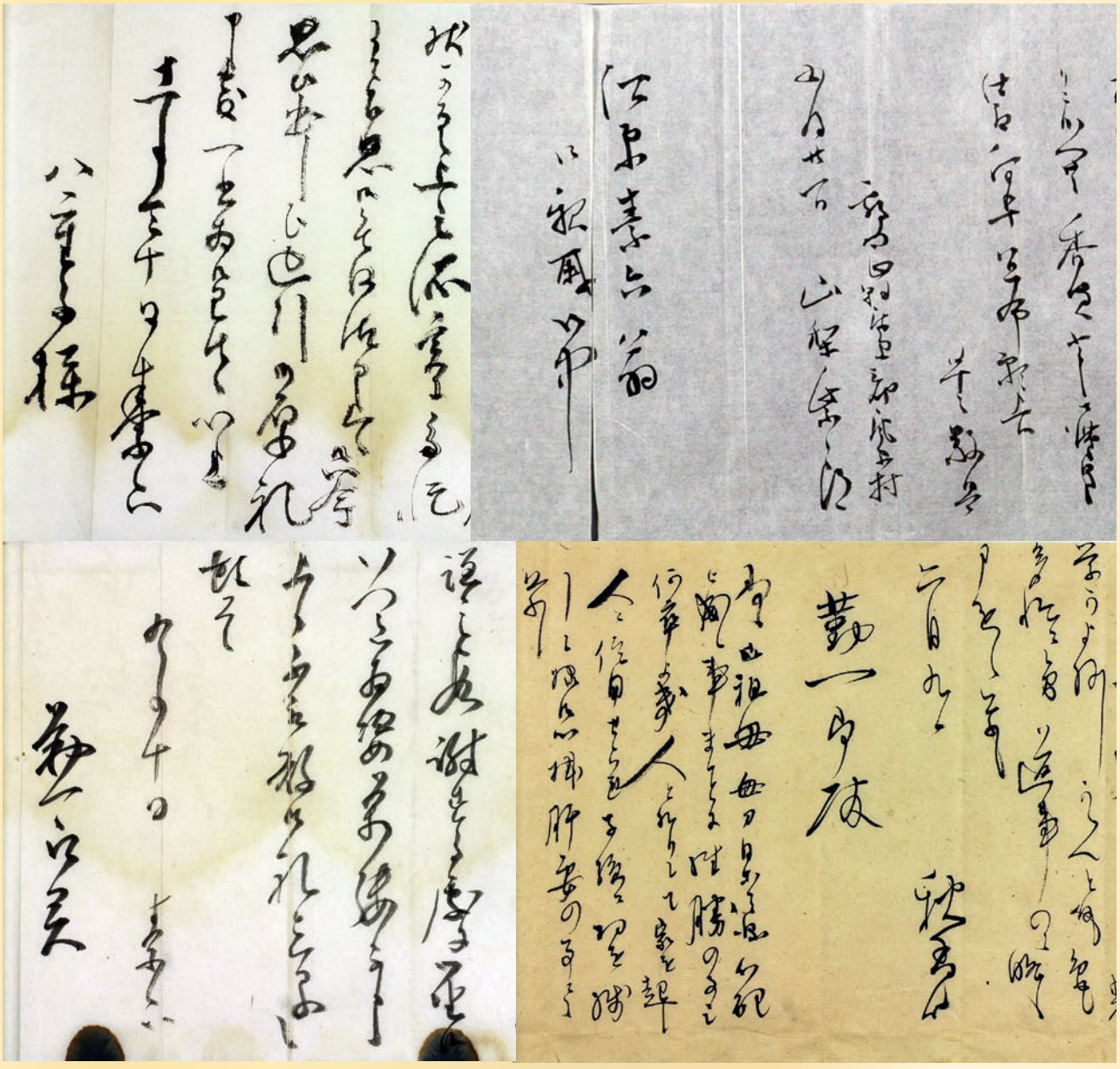
二〇二六年一〇月

通巻167号

■江原素六とその周辺　77
　江原素六と静岡県の素封家たち

■ぬまづ近代史点描　88
　沼津短歌会の横川有信

■「昭和100年」記念　富士・沼津・三島　三市博物館共通テーマ展開催のお知らせ



角田八重子宛江原素六書簡　　江原素六遺族宛山梨紫朗悔み状
角田勤一郎宛江原素六書簡　　角田勤一郎宛中村秋香書簡
当館蔵

江原素六とその周辺 77

江原素六と静岡県の素封家たち

江原素六を推し立てて、官有地にされてしまった愛鷹山入会地の払い下げに尽力した地元有力者の一人に、駿東郡長泉村（現長泉町）納米里の永井嘉六郎（一八四五～一九二二）がいる。永井は江原の後継者として、明治三一年（一八九八）には静岡県第七区から衆議院議員に当選するなど、同じ自由党系の政治家としても活動した。同三三年（一九〇〇）、麻布中学校の校舎建築にあたって三五〇円を寄付するなど、東京でも江原を支援し、長く交友関係にあった。そのため亡くなった際には、息子永井寛太郎（一八六七～?）らが江原に対し、新聞に死亡広告を掲載するにあたり、「御尊名を友人惣代の中ニ借用」させてもらったので、事後になってしまい「甚だ恐縮之至」であるが、ご了承願いたいとの書簡が送られている（大正一一年三月二七日付、当館蔵・江原文書Ｅ―ａ―４４１）。実際に『静岡新報』大正一一年三月二八日号に掲載された広告には、親戚総代として岩崎勲・星野太郎・直井惣兵衛、友人総代として江原素六・湯山寿介・山下久二の名が載せられた。

江原が没したのは、永井の死去からわずか二か月足らず後だった。遺族には多くの悔み状が寄せられたが、その中の一通に下記に翻刻するものがある（江原文書Ｕ―２６１）。

謹啓　江原素六翁御逝去之趣、新聞紙上ニテ承知驚入候　御一統様御痛嘆之程如何はかり、乍恐察申上候　早速参堂之上、御吊問申上可き筈之処、遠路思ふに不任、乍畧義筆中申上候

封中ハ甚尤軽慚之至リニ候へ共、香伝へ少々謹呈仕度、何卒宜希願上候　早々敬具

五月廿一日　　静岡県庵原郡庵原村　山梨紫朗

江原素六翁
御親戚御中

差出人の山梨紫朗（一八八三～一九七七）は、庵原村（現静岡市清水区）の素封家である。近世後期の漢学者として知られる山梨稲川（一七七一～一八二六）は、五代前の先祖の弟。紫朗は麻布中学校に学んだことがあったが、在学中に父が亡くなったため、中途退学した。江原校長のことを深く尊敬していたとされ、そのことはこの悔み状からもうかがえる。紫朗の叔父（母の弟）星野太郎（一八七〇～一九三三）は、永井嘉六郎の三女ひでを妻にしていた。星野家は駿府町奉行配下の与力で、太郎の父星野鉄太郎（一八三七～一九〇七）は静岡藩時代には静岡学問所教授世話心得・同調役、横須賀勤番組頭支配世話役頭取などをつとめ、後に初代静岡市長になった人物。太郎自身は、東京商科大学附属商学専門部教授兼東京商科大学予科教授をつとめた。星野太郎と永井寛太郎は江原の弔問に訪れたらしく、その時の名刺が残っている。

山梨紫朗の実弟萩原民治（一八八八～?）は、田方郡川西村（現伊豆の国市）小坂の萩原正夫の婿養子となり、村長をつとめたほか、庵原から柑橘栽培の技術を導入し、現在に続く小坂のミカン生産の基礎を築いた。養父萩原正夫（一八六三～一九一七）は、江原素六とともに第五回総選挙にて第七区から衆議院議員に選出された、同じ自由党系の政治家だった。

星野鉄太郎の母方の従弟には、駿府城代組与力の出身で、やはり静岡藩時代には静岡学問所調役などをつとめた歌人中村秋香（一八四一～一九一〇）がいた。中村の姉妹は富士郡大宮町（現富士宮市）の素封家角田家、駿東郡西間門村（現沼津市）の大地主長倉家に嫁ぎ、それぞれ角田勤一郎（浩々歌客、一八六九～一九一六）、長倉



萩原正夫
『明治肖像録』所載



中村秋香
『不尽廼舎遺稿』所載



山梨易司
『金蘭画鑑』所載

誠一郎を産んだ。文芸評論家として知られる勤一郎は、江原が校長をつとめた沼津中学校の卒業生。勤一郎の母八重子は、江原の影響でキリスト教に入信した。県会議員・駿東実業銀行頭取などをつとめた誠一郎は、戊辰戦争後に江原を一時匿った長倉源左久の息子だった。源左久の妻（中村秋香の妹）が駿府から西間門村へ帰る途中、「幕軍の敗残兵として、傷を負って、街道をとぼ〳〵と歩いている青年」を見つけ、車（駕籠？）に乗せて連れ帰ったのが、後の江原であったという。

ところで、山梨紫朗の曾祖父の弟に、山梨佐輔（景義・董清・一義・蘆学）という興味深い人物がいた。早世した兄に代わって一時家を継いだものの、甥が成長した後は分家し、嘉永七年（一八五四）江戸に出て武士になった。御家人株を買い、幕府の御徒になったらしい。江戸では牛込中御徒町に住み、「禅学」に通じた文人としても知られた。幕末には箱館奉行支配定役などとして蝦夷地・樺太に勤務、維新後は故郷である駿河に移住し、静岡藩の小島勤番組世話役介取締となった。

佐輔の子山梨易司（甲子三郎、一八四八～一九〇七）は、幕府陸軍の騎兵士官をつとめた後、なぜか加賀藩に召し抱えられた。明治に入ると静岡に移り、『静岡新聞』『静岡大務新聞』『静岡民友新聞』などを発行し、新聞社の経営者として成功した。

易司の弟山梨卓爾（鶴蔵）も、箱館でのロシア語伝習生や横浜でのフランス語伝習生に選ばれ、幕府派遣ロシア留学生の候補になるなど、優秀な人だったらしい。『智環啓蒙図解』第一編（橋瓜貫一著、明治五年刊）、『天然人造道理図解』二篇（橋爪編、明治六年刊）といった書籍の校訂を担当してもいる。

江原をめぐる人脈は、維新後に築かれた中央・地方での政治家・教育者・キリスト者としてのそれと、旧幕府・静岡藩以来の人間関係とから成っていた。ただし、江戸ではなく駿府在勤の幕臣だった星野・中村らとは、明治以降に知り合ったはずである。山梨家とも、角田・長倉・永井・萩原という地元素封家を介しての関係性だったと思われる。

（樋口雄彦）

〔参考文献〕『麻布中学校校友会雑誌』第三号・第四号（一九〇〇年）、山梨治保『山梨家十代記』（一九九一年、私家版）、『近世人名録集成』第二巻（一九七六年、勉誠社）、倉沢剛『幕末教育史の研究』二（一九八四年、吉川弘文館）、『函館市史　通説編』第二巻（一九九〇年、函館市）、高室梅雪『静岡県現住者人物一覧』（一八九九年一一月）、伊東圭一郎『東海三州の人物』（一九一四年、静岡民友新聞社）、拙著『幕臣たちは明治維新をどう生きたのか』（二〇一六年、洋泉社）、「富士郡大宮町・角田家と江原」（『沼津市明治史料館通信』第50号、一九九七年）、新屋五代巳之吉妻かつ「長倉家由来のおぼえ」（手書きコピー）

ぬまづ近代史点描　88

沼津短歌会の横川有信

明治三六年（一九〇三）一一月に駿東郡沼津町で結成された沼津短歌会は、短歌を愛好する人々のサークルである。和歌を嗜む者たちは、近世後期の国学の普及などによって沼津とその周辺にも少なからず生まれていたが、「短歌」は伝統の打破をめざしたものであった。沼津短歌会は、正岡子規が主導した根岸派による革新を受け継いだ伊藤左千夫（一八六四～一九一三）と密接な親交関係を結び、伊藤が中心となった雑誌『馬酔木』（一九〇三年創刊）には、会で詠まれた作品が各号にわたって掲載された。

沼津短歌会のメンバーには、槇豊作（不言舎）、間宮徹太郎（黄庭）、大塩平作（学道）、横川有信（真古文）、池谷観海（鉱太郎）、公野利文（半次郎）、木村秀枝らがいた。槇は開業医、間宮は沼津高等女学校教師、大塩・池谷は沼津中学校教師、公野は韮山中学校教師であった。彼らは、明治三八年（一九〇五）三月に沼津を訪れた伊藤と交流した。伊藤は槇らの案内で千本松原や牛臥・静浦を遊歩し、槇宅に宿泊し、三島館で食事をするなど、沼津とその近郊の風光を楽しんだ（「沼津小遊」『左千夫全集』第一巻、一九二〇年、春陽堂）。

沼津短歌会は、会としての歌集『沼津風』（一九〇八年、大塩平作編、蘭契社発行）を刊行した。『沼津風』には、会員の作品が順番に収録されているが、一番目に掲載されているのが横川有信である。『馬酔木』誌上に紹介された沼津短歌会の作品中にも、横川の作品は五〇首以上ある。これまで横川の経歴については、先学による沼津短歌会の研究（関口昌男『槇不言舎の研究』、二〇〇一年、静岡新聞社）にも言及がないので、ここでは新たに判明した事実を紹介してみたい。

国の公文書には、横川の履歴書（国立公文書館蔵「職務進退　元老院　判任官以下履歴原書　転免死亡ノ部」所収）が保存されている。それによれば、彼の経歴は以下の通りである。族籍は東京府平民、改姓前は中野有信といい、旧称は俊松、安政元年（一八五四）七月生まれ、行政官給仕（明治元年一一月一九日）、同給仕頭取（二年六月四日）、舎人局直丁（三年一一月二七日）、正院権大舎人（四年七月一二日）、免官（五年八月一九日）、元老院等外二等出仕（八年七月八日）、司法省等外一等出仕（九年四月五日）。

さらに、各年に発行された官員録を追っていくと、宮城県八等警部（明治一五年二月時点）、熊谷治安裁判所書記・十六等出仕（一七年一二月時点）、下田治安裁判所書

記（一九年一〇月時点）、沼津区裁判所熱海出張所書記七等（二三年一月時点）、赤間関区裁判所書記（二八年八月時点）、千葉県内務部七等属（同年一一月時点）といった具合に、官吏としてたどった横川の足跡がわかる。明治三〇年（一八九七）頃には沼津区裁判所管内公証人になっていた。

沼津短歌会の他のメンバーといつ頃から交遊が生じたのかはわからないが、槇豊作の日記には、明治三六年（一九〇三）六月二三日条に「横川有信氏詠草を示し意見を示（求？）む」（『槇日記』六、一九八六年、槇日記刊行会）とあり、この頃からであろうか。

横川は、実は旧幕臣であった。先に述べたように旧名を中野俊松といったことから、陸軍奉行並支配勤仕並中野俊左衛門の惣領として、慶応三年（一八六七）九月四日に家督相続を許されたことがわかる（『近世庶民生活史料藤岡屋日記』第十五巻、二〇五頁）。中野俊左衛門は、直心影流の剣客男谷信友（精一郎・下総守）の実子で、講武所剣術教授方・小姓組・奥詰などをつとめた、三〇〇俵取の旗本だった（『江戸幕臣人名事典』第三巻、一九九〇年、新人物往来社）。講武所剣術師範・同奉行並などをつとめた男谷は、勝海舟の従兄として知られる。すなわち横川にとって、勝海舟は祖父の従弟（厳密には再従弟）という関係になる。なお、信友の孫男谷忠友（勝三郎）は、静岡藩士となり、遠州横須賀奉行や静岡県大属・などをつとめている。

中野俊松は、維新後は朝臣、行政官支配となり、静岡には移住しなかった。明治七年（一八七四）には事情により士族から平民籍に入り（東京都公文書館所蔵文書）、中野姓を母方の横川姓に変えた（塩圀彦氏のご教示による）。

沼津短歌会の会員に他に旧幕臣はいなかったが、槇豊作の父槇正覚は静岡藩沼津病院に学んだ人、間宮徹太郎の父間宮喜十郎は沼津兵学校附属小学校に学んだ人であり、沼津移住の旧幕臣たちとは比較的近い位置にいた。横川と共通の知人はいたのかもしれない。

横川が沼津区裁判所管内兼吉原区裁判所管内公証人のまま亡くなったのは、明治四一年（一九〇八）三月一一日のことだった（『官報』明治四一年三月二〇日、『明治過去帳』）。槇豊作の歌集『不言舎集』第一巻（一九三八年）には、明治四一年（一九〇八）に詠まれた「悼横川真古文　真夜中に病あつしと馳行きて呼べと答ず亡骸にして」という一首や、「花時懐亡友真古文」と題された二首が収録されている。

（樋口雄彦）



伊藤左千夫と沼津短歌会の人々

『ふるさとの想い出　写真集　明治大正昭和沼津』所載・槇克男氏原版所蔵

前列左から伊藤左千夫、間宮徹太郎、後列左から槇豊作、大塩平作、横川有信

「昭和100年」記念　富士・沼津・三島　三市博物館共通テーマ展開催のお知らせ

「昭和の産業と人びとの暮らし　沼津、青い春。～焼け跡から未来へ～」

日　時　10月31日(土)～令和９年１月31日(日)　９時～16時30分

ところ　明治史料館　３階　展示室

内　容　終戦後、沼津は復興から高度経済成長へ。繁栄の陰に潜む課題と向き合い、夢と熱気で駆け抜けた激動の約40年間を紹介します。

沼津市明治史料館通信

第167号

令和８年10月31日

編集・発行　沼津市明治史料館

〒410-0051 沼津市西熊堂372-1

TEL 055－923－3335

FAX 055－925－3018

印刷　みどり美術印刷株式会社

【関連イベント】

■歴史講演会

「『豊かさ』とは何だったのか？-沼津の戦後復興から高度経済成長-」

と　き　12月12日(土) 14時～16時

ところ　明治史料館　２階　講座室

講　師　荒川　章二氏（国立歴史民俗博物館　名誉教授）

参加料　無料

定　員　50名（先着順）

▲ホームページはこちらから

講演会の申込方法など、詳しくは当館ホームページをご覧ください。